

***登録有形文化財に答申された国立天文台ゴーチェ子午環第一(南)子午線標室**

2013年11月15日の文化庁文化審議会での国立天文台の7件の建造物が新たに登録有形文化財として文部科学大臣に答申された。国立天文台にはすでに登録有形文化財になっていた太陽塔望遠鏡(1998年登録)、第1赤道儀室(2002年登録)、大赤道儀室(2002年登録)の3件があり、これで同じキャンパスに10件の登録有形文化財となった。今回はその中の一つ「国立天文台ゴーチェ子午環第一子午線標室(写真1)」について書く。アーカイブ新聞第706号に「登録有形文化財になった国立天文台表門」、第707号に「登録有形文化財になった国立天文台門衛所」、第708号に「登録有形文化財になった国立天文台旧図書館及び倉庫」、第709号に「登録有形文化財になった国立天文台レプソルド子午儀室」、第710号に「登録有形文化財になった国立天文台ゴーチェ子午環室」という記事を書いた。国立天文台は1988年に設立された文部省直轄の大学共同利用機関であったが、2004年に設立された大学共同利用機関法人「自然科学研究機構」の一員となった。その前身の一つである東京大学東京天文台は1888年に麻布区飯倉に設立され、東京の中心の麻布から暗い空と広大な敷地を三鷹村に土地を求め、1924年9月に移転した。1923年の関東大震災で麻布にあった観測器械は壊滅的な損害を受けたが、ゴーチェ子午環は、麻布の狭い敷地では展開できず、活躍は三鷹移転後になった。ゴーチェ子午環室が大正13年5月9日竣工、子午線標室は大正14年2月28日竣工、延べ面積は第一、第二子午線標室34平米である。



写真1 現在のゴーチェ子午環第一子午線標室

子午環は子午線上を通過する天体の時刻と高度を精密に観測し、天体の赤経・赤緯を求め、天文学の根幹である基本星表のデータを取得する望遠鏡である。そのため、望遠鏡が真北、天頂、真南を通る子午線上を観測する性能評価のための設備の一つとして設置されているのが子午線標である。第一子午線標は真南の視準点でありゴーチェ子午環望遠鏡の不動点から真南 100m の位置に設置されている。望遠鏡を水平にした時に子午線標が中心に来るように、子午線標室は写真 1 で見るように地上 2 階建てになっており、子午線標（写真 2）のピアは 2 階の床を貫いて（写真 3）、2 階の床とは接していない。また地下においても子午線標室の建物基礎とは分離されており、建物の振動が伝わらないように 1 階部分には一面に砂が敷き詰めてある。



写真 2



写真 3

ゴーチェ子午環は 1984 年に建設された新しい自動光電子子午環にその役目を譲り、30 年を経ており、第一子午線標室は今では深い森の中に埋もれている。その存在は知ったもの



写真 4

しか辿り着けない深い森の中にある（写真 4）。登録有形文化財になったことから、その整備として、周囲の木々を駆りはらうことも考えられるが、年月経て森の中にひそかにたたずむ姿もまた貴重な事実であり、このまま静かな余生を送らせたいと思っている。

子午線標室の建設時の図面は国立天文台に残っておらず、今

回、登録有形文化財に申請するに当たっては、日本建築学会の手で実測図が作成された。図1が平面図、図2が立面図である。

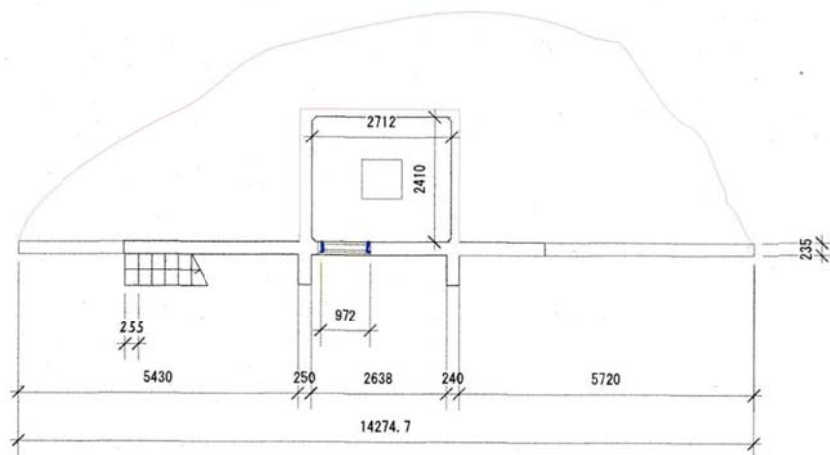


図1 平面図

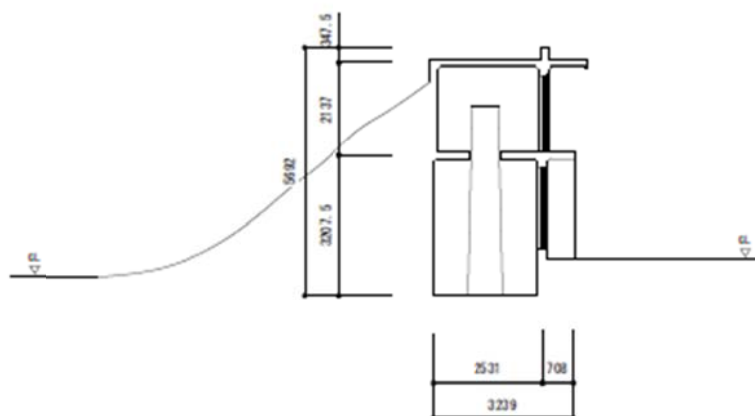


図2 立面図

図1、図2から分かるように子午線標室の裏側は土盛りで覆われており、ピアの温度変化を抑える工夫がなされている。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp